

松 山 大 学 論 集  
第 21 卷 第 1 号 抜 刷  
2 0 0 9 年 4 月 発 行

## 帝国農会幹事 岡田温<sup>(16)</sup>

—— 帝国農会幹事時代<sup>⑩</sup> ——

川 東 靖 弘

# 帝国農会幹事 岡田温<sup>(16)</sup>

—— 帝国農会幹事時代<sup>⑩</sup> ——

川 東 埤 弘

## 目 次

はじめに

- 第1章 大正10年
- 第2章 大正11年（以上，第18巻第1号）
- 第3章 大正12年
- 第4章 大正13年（以上，第18巻第2号）
- 第5章 大正14年
- 第6章 大正15年（以上，第18巻第5号）
- 第7章 昭和2年
- 第8章 昭和3年（以上，第18巻第6号）
- 第9章 昭和4年（以上，第19巻第2号）
- 第10章 昭和5年（以上，第19巻第3号）
- 第11章 昭和6年（以上，第20巻第4号）
- 第12章 昭和7年（以上，第20巻第5号）
- 第13章 昭和8年（以上，第20巻第6号）
- 第14章 昭和9年（本号）

## は じ め に

前稿<sup>1)</sup>で、帝国農会幹事・岡田温の帝国農会幹事時代（大正10年4月～昭和11年9月）の活動のうち、大正10年～昭和8年まで考察したが、本稿では

---

1) 拙稿「帝国農会幹事 岡田温<sup>(7)～(15)－帝国農会幹事時代<sup>①～⑨</sup>－」(『松山大学論集』第18巻第1号，2，5，6号，第19巻第2，3号，第20巻第4，5，6号，2006年4，6，12月，2007年2，6，8月，2008年10，12月，2009年2月)。</sup>

昭和9（1934）年の温の活動について考察することとする。

## 第14章 昭和9年

昭和9（1934）年、温、63歳から64歳にかけての年である。帝国農会の幹事をつづけている。

本年は前年産の米大豊作（7,083万石）のために、米価の大暴落が予想されたが、斎藤実内閣の制定した米穀統制法の発動により、大量の過剰米が買い上げられ（1,200万石余）、米価大暴落が食い止められた。1石当たり米価を見ると、9年1月は22.69円、2月も23.04円、3月も22.99円で米穀統制法で定めた最低価格基準（23.30円）をなお下回る低米価水準が続いたが、4月以降になると米価は次第に回復、上昇し始め、4月23.70円、5月24.56円、6月25.09円、7月25.94円、8月27.50円、9月28.46円、10月30.30円と推移し、昭和農業恐慌時の極端な低米価水準（18円台）を脱したといえる。しかし、回復したといっても、昭和9米穀年度（昭和8年11月～9年10月）の米価は24.90円で、帝農調査の昭和8年産の自作者の米生産費23.10円を少し上回る程度にすぎなかった<sup>2)</sup>

米穀統制法の発動にもかかわらず、余り国内米価が上がらなかった原因は、植民地米（朝鮮、台湾米）の大量移入であった。この植民地米移入を見ると、昭和5米穀年度の移入量は735.2万石であったが、6年度に1,069.1万石、7年度に1,061.7万石、8年度に1,174.9万石と1,000万石を超え、9年度には実に1,407.7万石にも増大した<sup>3)</sup> この安価で大量の植民地米が国内米価を圧迫し、米価回復を遅らせた主因であった。そして、植民地米対策が本年の帝国農会の最大の課題となった。

昭和9年4月以降に米価はある程度回復したが、9年産の米収穫高は5,184

---

2) 加用信文監修、農政調査会編集『改訂 日本農業基礎統計』（農林統計協会、1977年）419、546頁。

3) 大豆生田稔『近代日本の食糧政策』ミネルヴァ書房、311頁。

万石で、前年に比し 26.8%，前 5 ヶ年平均収獲高に比し 17.2%の減収という大凶作となり、農家は凶作飢饉に陥った<sup>4)</sup>。その原因は、本年春以来、全国的に異常気象となり、春季には東北、北陸において融雪遅延により田植が遅れた上に、夏季には低温、日照不足が続き、とりわけ開花期に異常低温となり大冷害となった。また、北陸では夏季に大水害も発生した。他方、四国、九州一帯は降雨が少なく、大旱魃となり（特に、愛媛、鹿児島が酷かった）、惨憺たる状態となったのである。また、大凶作なら米価が高騰するが、米価は上がらず、11月 29.87 円、12月 29.18 円と推移したままであった。

また、繭価（全国平均上繭 1 貫当たり、春蚕）は一昨年（昭和 7 年）が未曾有の繭価安（2 円 54 銭）の恐慌状態であったが、8 年に回復したものの、昭和 9 年に再び 3 円を割り、養蚕恐慌が続いた<sup>5)</sup>。

結局、昭和 9 年も農業、農村、農民の危機が持続した。帝国農会はこのような危機に対し、下からの農政運動を盛り上げていき、1月 26、27 日道府県農会長協議会、28 日全国都市農会長協議会（外地米対策等）、3月 6 日道府県農会長会議（外地米対策）、4月 30～5月 2 日道府県農会主任技師協議会（経済更生指導に関する件、農家組合指導に関する件等）、6月 6～8 日道府県農会長会議（米穀対策、蚕糸対策等）、8月 21、22 日道府県農会長協議会（農村救済策）、10月 18～20 日道府県農会長会議（米穀政策、蚕糸政策、災害地方救済対策等）、10月 23～26 日第 26 回帝国農会通常総会（米穀政策、蚕糸政策、災害地方救済対策、負担均衡等）等々を開いた。そして、その政策立案、運動等の中心に温が居た。以下、見てみよう。

## 第 1 節 帝国農会幹事活動関係

昭和 9（1934）年、温は正月を故郷で迎えた。1 日は石井小学校にて新年の拝賀式に出席し、その宴会において一場の講話を行った。2 日は武智二郎、相

4) 『帝国農会報』第 25 巻第 2 号、昭和 10 年 2 月、83、84 頁。

5) 『帝国農会報』第 24 巻第 7 号。6 頁。

原徳男等の来客に应对、3日は万福寺における土居得能表忠会役員会、4日は温泉郡農会、愛媛県農会、農事試験場などを訪問し、新年の挨拶、また、道後大和屋にて門田晋農会長と農道会<sup>6)</sup>などについて意見交換を行った。6日は温泉郡農会を訪問し、岡本馬太郎郡農会長と会談、また、県農会を訪問し、多田隆幹事らと会談等を行った。

1月7日、温は午前10時松山発の汽車にて西条に行き、午後1時より西条農学校の学生に講義を行い、福亭に投宿し、翌8日も午前8時より12時半まで農業経営について講義を行い、終わって、岡山に行き、午後6時に着し、はつね旅館に投宿した。翌9日、温は午前10時岡山を發し、島根に向い、午後3時32分湯町に着し、玉造温泉に行き、保□館に宿泊し、翌10日午前9時半より、島根県農会にて開催の島根県農村更生指導者養成講習会に出席し、午前には農林省の河合技師が米穀統制法について講義し、午後は温が1時より4時まで農業経営について講義した。11日も午前9時より午後4時まで講義を行った。そして、午後8時15分湯町駅発にて帰京の途につき、翌12日午前7時20分大阪に着き、京都に行き、駅にて京都府農会幹事大島国三郎と待ち合わせ、帝農幹事候補の平田慶吉<sup>7)</sup>のことや、農道会の件などについて懇談し、10時20分発にて京都を發し、帰京した。

1月13日以降、温は幹事として種々業務を行い、農政運動に従事した。13日は終日在宅し、農村更生指導者養成講習会の要項を執筆し、14日は月田副

---

6) 昭和8年12月15日、神戸市にて兵庫県農会長の山脇延吉が発起人となり、大日本農道会を結成した。その趣旨は次のとおり。今日の農村は未曾有の経済不況の重圧を受け、非常の重態にさらされている。この農村の非常事態を救うべく非常時内閣が成立したものの、現内閣は農村の窮状を認識せず、その匡救策は「姑息不徹底」であり、明年度農林予算に対しても「冷淡」「全滅」であり、ここに至り、「わが建国の大精神たる瑞穂の国是を鼓吹興隆」し、「天下の世論を高める」ために大日本農道会を結成した、というものであった。そして、筆頭理事に山脇延吉、理事に門田晋（愛媛県農会長）、幹事長に亀川哲也（東京）を選出した（兵庫県農会『農会通信』第253号、昭和8年12月20日）。

7) 昨年10月の第25帝国農会総会で幹事長に相当する席幹事を置くことを決定し、その候補が平田慶吉であった。平田慶吉は明治20年10月石川県に生まれ、45年東京帝大法科を卒業し、大阪鉱務署に勤務し、ついで農商務書記官、営林局事務官、東京営林局長、京都商工会議所理事、大阪営林局長を勤めていた。この時46歳（『大衆人事録』第3版）。

会長を私邸に訪問し、関西農会联合会からの全国農会大会開催要求の件<sup>8)</sup>、米穀統制法対策の件、新設幹事長の件について協議した。15日は月田副会長、高島幹事と道府県農会実行委員会の協議事項について協議し、また、農林省に出頭し、長瀬貞一農務局長、湯河元威農政課長に面会し、追加予算、帝農幹事問題について所見を述べた。16日は道府県農会長実行委員会を開催し、秋田、茨城、埼玉、長野、新潟、神奈川、愛知、岐阜、兵庫、広島 of 委員等が参集し、(1)外地米移入制限、(2)負担軽減、(3)農林省追加予算、(4)蚕糸業対策、(5)救農土木事業善後処理、について協議し、26、27日に全国道府県農会長協議会を、28日に全国道府県郡市農会長協議会を開催することを決定した。18日は改造社から依頼の原稿（1934年の日本の景気を左右する最大の問題）の執筆等を行い、19日は埼玉及び千葉の村単位の農村経済更生計画要項を執筆した。20日は副会長、3幹事にて道府県農会長協議会及び郡市農会長大会の議案を協議した。21日は矢作栄蔵先生の追悼文を執筆し、22日は午後3時より上野学士院にて開催の文部省学術振興会の米穀委員会があり、河田、神戸、気賀、高田（保馬）、那須、佐藤、橋本、大槻、東畑らが出席し、温も米穀問題について意見を述べた。23日は午後6時より丸の内会館にて農政研究会幹事会を開き、東武、八田宗吉、福井甚三、高橋熊次郎、高田耘平、荒川五郎、平野桑四郎、中田正輔ら出席の下、斎藤内閣下の第65議会対策について協議し、米穀統制法の改正、農家負担の軽減等を議会に提出することを決めた<sup>9)</sup>。24日は農村更生計画調査様式の作成、25日は道府県農会長協議会の準備をした。

1月26、27日の両日、帝国農会は商工奨励館にて道府県農会長協議会を開催した。全国から農会長らが出席し、また、農林省より長瀬貞一農務局長、湯河農政課長、渡邊技師等が臨席し、26日は全国道府県郡市農会長協議会に提案する決議案、実行方法案を審議した。27日は米穀統制法による米穀販売に

8) 昭和9年1月9日、兵庫県農会楼上にて関西府県農会総会が開催され、第65議会再開の初頭を期し、全国農会大会を開催し、政府および政党に農村対策を要望することを決議した（兵庫県農会『農会通信』第255号、昭和9年1月20日）。

9) 『帝国農会報』第24巻第2号、昭和9年2月、117頁。

関する件、農村更生指導に関する件を協議、議了し、その後、温が商工団体による産業組合に対する反産運動に対し反対の決議案を提案し、可決された。この日の日記に「道府県農会長会議。協議事項、打合せ事項ヲ議了シ、自分ヨリ反産運動反対決議ヲ提議ス。門田氏、長島氏ノ反対意見アリシモ多数ノ賛同ニテ次ノ決議ヲナス。決議。系統農会ハ商工団体ノ反産業組合運動ニ反対ス」とある。閉会后、兵庫県農会幹事の長島貞より農道会の件について協議の要請があったが、協議に入らなかった。

1月28日、帝農は午前10時より東京赤坂三会堂にて全国道府県郡市農会長協議会を開催した。全国の農会長450余名が出席し、また、農林省から長瀬農務局長、湯河農政課長らも出席し、温が開会の辞を述べ、月田副会長が大会開催に至る事情について挨拶を行い、増田幹事が農政運動について詳細な報告を行い、ついで、来賓の高田耘平、福井甚三、清瀬一郎の激励の挨拶があった。そして、協議事項の農村対策実現促進に関する件、(1)米穀政策に関する件、(2)国民負担均衡に関する件、(3)農会技術員給国庫補助に関する件、(4)肥料政策に関する件、(5)蚕糸政策に関する件、(6)救農土木事業に関する件、が提案され、委員会に付された。午後、委員長報告及び大会宣言、決議を満場一致で決定した。この大会での宣言、決議は次の如くで、現下農村窮乏、農村匡救を叫び、外地米の移入制限（政府による移入独占）による米穀政策の徹底等を掲げていた。

「宣言 農村窮乏打開に関し、系統農会は其の使命に従ひ、爾来之が対策の実現に努力し、其の一部は稍緒に就きたるの感無きに在らずと雖も、尚動もすれば農村の深刻なる現状に認識を欠き農村匡救は殆んど政策の犠牲に供せられんとす。固より非常時国難に処するの方途として軍備充実の緊切なるや言を要せずと雖も、銃後の農村窮乏を放置して焉ぞ国防の完璧を期するを得んや。仍て茲に道府県及郡市農会長会議を開催し、重て従来の主張を明確にし、第六十五議会に於て之が徹底的解決に邁進せんとす」

「決議 一、朝鮮、台湾米の移入を政府の独占とし、米穀政策の徹底を期す。

一、国民負担の均衡を期す。一、農会技術員給国庫補助の実現を期す。一、肥料政策を確立し、価格の公定、需給の調整を期す。一、蚕糸業の根本国策を樹立し養蚕経済の安定を期す。一、救農土木事業の既定計画遂行を期す」<sup>10)</sup>

1月29日、全国道府県郡市農会長会議実行委員会を帝農にて開催し、温は一同と衆議院に行き、各農区1名の代表者が農林大臣や勝田内務参与官に面会、陳情した。また、各政党の幹部に対し、運動委員の山脇延吉が代表して陳情した。30日に温は増田幹事と共に運動委員を率い貴族院に行き、研究会、公正会、交友倶楽部の幹部に陳情した。温はその後、放送局に行き、午後9時より農業講座で米穀統制法について話をした。31日は残留の運動委員32名と今後の運動方針を協議した。

2月も温は種々業務を行い、農政運動（外地米問題、農会技術員給国庫補助問題等）に従事し、また、出張した。1日は午後6時より東京駅ホテルにて農政研究会幹事及び運動委員との懇談会を開き、東武、八田宗吉、高田稔平、荒川五郎、高橋熊次郎、中田正輔代議士等出席の下、今後の打ち合わせを行った。2日は神奈川県平塚に行き、同県学務部主催の教育農事講習会に出席し、午前10時より午後3時まで小農の特性について講義した。3日は運動委員の山脇延吉らとともに朝鮮総督府の今井田清徳政務総監、台湾総督府の平塚広義総務長官に面会し、朝鮮・台湾米移入制限について陳情した。4日（日）は終日在宅し、帝国教育会依頼の原稿を執筆、5日は山脇延吉らと共に農林省に石黒農林次官を訪問し、陳情した。また、外地米統制問題について朝鮮側が反対運動をしているので、その対策について、温は荷見米穀部長とも打ち合わせした。6日は衆議院にて田淵会計課長と追加予算について懇談し、また、高橋熊次郎、平野桑四郎代議士に面会し、農会技術員給問題を依頼した。7日は運動委員の菱田尚一、菊池龍太郎、浅香らを帯同し、大蔵省を訪問し、黒田英雄大蔵次官に農会技術員給問題を陳情した。それに対し、黒田次官は「本問題ハ大

---

10) 『帝国農会報』第24巻第3号、昭和9年3月、130頁。



蔵省ノ最難問題」なる旨を言明した。後、温は浅香の斡旋で、前農林大臣の山本悌二郎（政友会）を訪問し、陳情した。その後、御殿場に行き、東京帝大農学部実科生のために小農の経済機構について2時間ほど講演した。9日、温は千葉県田中村に行き、同村小学校にて開催の田中村更生計画全村協議会（帝農指導）に出席し、午前は川合技師が、午後は温が更生計画に対する覚悟について2時間ほど講演を行い、終わって東京に戻り、帝国ホテルにて開催の朝日新聞主催の米穀問題座談会に出席した。10日は運動委員の菱田尚一、菊池龍太郎、浅香らとともに農林省の長瀬農務局長を訪問し、農会技術者給補助問題について最後の打ち合せを行った。しかし、同問題は「最難関」であった。あと、一同と政友会本部を訪問し、島田総務に面会し、農会技術者給補助問題について陳情した。11日（日）は『農政研究』3月号の原稿（反産運動に関する原稿）の執筆を行った。12日、運動委員が増加した（栗下恵毅、麦生富郎、松山兼三郎、大橋克等）。この日、温は農林省追加予算が予定に達せず、また、農会技術者給補助は「全部抹削」との情報を聞き、運動員と対策を協議し、温と松山兼三郎が牧野忠篤会長を訪問し、三土忠造鉄相に依頼することにした。13日も運動委員が活動し、大口嘉六代議士を訪問、陳情し、また、石黒農林次官をも訪問し、運動法について懇談した。

2月14日、温は午前9時東京発にて、大分県に出張の途につき、午後5時20分大阪に下車し、8時発の緑丸に乗り、翌15日午後2時30分別府に着し、松屋に投宿した。16日、温は午前9時半より大分市教育会館にて九州地区の農村経済更生計画指導者養成講習会に出席し、来会の410余名に対し、午後4時まで講義した。17日も温が午前9時より12時まで講義した。終わって、大分から紫丸に乗り、午後6時40分高浜に着き、愛媛に帰宅した。18日は午前10時より愛媛県公会堂にて、愛媛県主催の農村経済更生計画指導者養成講習会に出席し、来会の200余名に対し、午前10時過ぎより午後4時まで講義を行った。19日も午前中、講義を行った。そして、午後6時50分高浜発の紫丸に乗り、上京の途につき、翌20日午前6時20分神戸につき、6時40分三宮

発にて東京に向かい、午後4時東京に着した。

2月21日、農会技術者給補助問題は多少認められたので(20万円)、運動委員を本日を以ってひとまず引き上げることにした。23日、月田副会長より新幹事予定の平田慶吉の件について正式の話があり、事務分担について協議した。24日は帝農の米穀政策調査委員会を開催し、佐藤寛次、岡本英太郎、小林嘉平治、麻生正蔵、谷津新八郎、高田耘平らの出席の下、外地米移入制限につき、外地の反対運動に対する反対運動の件について協議し、声明書を発することにし、温がその作成を托せられた。25日(日)は終日在宅し、外地米統制に対する帝国農会の意志表示の原稿「外地米の移入統制は米穀政策の根本義」を執筆した。その主な内容は、(1)米穀統制法は米価の暴落を防止したことは事実であるが、その効果極めて不十分である。(2)外地米の完全なる移入統制を行ってこそ始めて米穀統制法期待の効果を顕す。(3)外地米移入統制の方法は法令をもって、毎米穀年度に内外地を通じ米穀の需要供給を計算し、内地に補給上必要なる数量だけの外地米を移入すること、外地における過剰米は政府に於いて買い上げ必要ある場合の外、内地へ移入せざること、外地米の移入は可及的月別平均たらしむること。(4)朝鮮米の内地移入増加は生産よりも多額であつて内地米の統制上幾多の支障がある、というものであった<sup>11)</sup> また、『帝国農会報』第24巻第3号の原稿「米穀統制法と専売法—外地米移入統制が生命—」も執筆した。その主な内容は、米穀統制法では米作農業の安定が得られないから、専売法だという議論には反対で、米穀統制法に補強工作を加えれば農業の安定が得られる、それは外地米の過剰移入に対し統制を加えることである、というものであった<sup>12)</sup>

2月26日、斎藤内閣は農林関係の追加予算を衆議院に提出した。その内容は籾貯蔵奨励1,450万円、農業土木事業増加400万円、繭共同保管施設助成増加60万円、農林漁業団体活動助成40万円、農村中堅人物養成10万円等、総

11) 『帝国農会報』第24巻第3号、昭和9年3月、1～4頁。

12) 同上、5～8頁。

額僅か2,090万円で、農会、農林省の要求といちじるしい差異があり、都市町村農会技術員給国庫補助は、農林漁業団体活動助成40万円中の20万円の「きわめて僅少」で「情けない予算」であった。<sup>13)</sup>

また、2月26日、帝農の総務幹事（幹事長に相当）として、平田慶吉（法学博士、元農林省大阪営林局長）が就任し、午後5時より築地灘万にて平田幹事の歓迎会を月田副会長、3幹事（温、増田、高島）及び農林省の渡邊技師、平川事務官らで行った。27日は増田幹事と共に大本貞太郎代議士（愛媛県選出）を訪問し、農林省追加予算並びに米問題について懇談し、議会での働きかけを依頼した。また、この日朝鮮総督府の渡邊忍農林局長、朝鮮農会理事三井榮長らが来会し、移入米制限問題については民間団体にて解決協議を図るとの話があり、その趣旨に賛同している。

2月28日、温は午後0時40分東京発にて愛知県に出張の途につき、午後6時20分名古屋に着し、翌3月1日、温は午前10時より愛知県公会堂にて開催の愛知県実行組合大会に出席した。この大会には県下から1,600余名が出席し、午前は表彰会、午後は篤農家の実験談があり、その後、温が講演を行い、終わって、午後3時50分名古屋発にて帰京の途につき、9時20分東京に着し、帰宅した。

3月も温は種々業務を行い、外地米統制についてよく農政運動に従事した。2日、外地米統制のために運動委員を招集し、谷津新八郎（茨城県）、麻生正蔵（帝農評議員、富山県）、藤田善太夫（新潟県農会副会長）、石坂養平（埼玉県農会長）、山崎延吉（兵庫県農会長）、長島貞（同県農会技師）らが参会し、温が作成した外地米統制に対する帝国農会の意志表示文を協議した。後、農林省に石黒次官、拓務省に河田次官を訪問し、外地米統制を陳情したが、河田次官は「法令ニヨル（外地米移入の）統制ハ絶対ニ不可能」と言明した。3日は午後6時より幸楽にて農政研究会幹部と運動委員の懇親会を開き、東武、福井

---

13) 『帝国農会報』第24巻第4号、昭和9年4月、17～18頁。

甚三、平野桑四郎、高橋熊次郎、高田耘平、荒川五郎、中田正輔代議士ら出席し、懇談の結果、来る6日に外地米問題のために農会大会を開催することを決めた。この日の日記に「右ハ勢ヒナレドモ効果ハ如何ニヤ。但シ、昨今農林、拓務両局確執相譲ラズ。政府モ困惑ノ状。本日書記官長等ノ妥協案モトマラザル趣キ。従ツテ農林案支持ニハ効アラン」とある。4日（日）は午前10時5分上野発にて埼玉県藤沢町に行き、同村更生計画指導講演のため出張し、来会の220余名に対し、午後2時より4時半まで講演し、5時5分発にて帰京した。5日、温は高島幹事、運動委員の麻生、菱田、谷津、藤田、長島らと共に衆議院に行き、福井甚三代議士の斡旋により堀切書記官長、黒崎法制局長に会見し、外地米移入統制について陳情した。また、貴族院に行き、糸原武太郎、上杉茂憲、高島順作貴族院議員にも陳情した。その後、温は荷見米穀部長にも陳情した。「部長ノ決意堅ク見ユ」。

3月6日、帝国農会は午前10時40分より帝農事務所にて道府県農会長協議会を開いた。温が外地米統制問題運動の経過報告を行い、農会大会に関する打ち合わせ（大会宣言、運動方法）を行った。そして、帝農は午後1時より赤坂三会堂にて外地米対策緊急農会大会を開催した。全国から300余名が出席し、来賓として、東武、高田耘平らの代議士、農林省の長瀬農務局長らが臨席し、温が開会の辞を述べ、月田副会長が主催者の挨拶を行い、外地米の移入統制を主張し、大会宣言及び決議案を提案し、満場一致議決した。宣言は「外地米移入対策の如何は内地農業者の死活に関する重大問題にして、我国米穀政策安危の岐るる所なりと伝へらるる如く、依然自由主義に頼らんか凡百の政策も無効に帰し幾億の国帑も空費に終わるのみならず内地農業者の思想上に及ぼす影響亦甚大にして国家のため寔に憂慮に堪えず。茲に緊急農会大会を開き、奮然蹶起し外地米移入の徹底的統制の実現に邁進せんとす」であり、決議は「外地米の移入は法令を以て左の如く統制せんことを期す。一、外地米の移入は毎米穀年度に於て内地の補給上必要なる数量を限度とすること、二、外地に於ける過剰米は政府に於いて之を買上ぐる、三、外地米の移入は月別平均ならしむ

ること」であった。なお、この決議文の内容は、温が作成した前述の「外地米の移入統制は米穀政策の根本義」と同じであった<sup>14)</sup>。後、実行方法を温が提案し、政党本部、首相、拓務、農林、朝鮮政務総監、その他の国务大臣の6班に分けて陳情することにし、温は農林大臣組を率い、石黒農林次官に面会、陳情した。7日午前10時、帝農事務所に外地米対策緊急農会大会実行委員が参集し、昨日の運動報告を行い、また、6班に分け、面会、陳情活動を行い、堤拓務次官、堀切書記官長、渡邊農林局長に面会した。8日も午前10時に実行委員が参集し、陳情しようとしたが、朝鮮総督府の今井田総監には面会しえず、また、永井拓相は在庁しているにもかかわらず、省議すでに決せりと面会を拒否した。なお、この日の閣議では外地米問題の決定がなされそうだったので、拓務省、朝鮮総督府への批判の声明をだし、また、永井拓相への詰問的質問書を出した。なお、この日の閣議で後藤文夫農相側が折れて、外地米は自由移入、買い上げ資金拡張の仲裁案で解決した。9日午前10時実行委員が参集し、対策を協議した。協議の結果、外地米問題に対する政府の移入制限なき資金増加案には反対することを決めた。この日の日記に「外地米問題窮地ニ陥リ一転シテ資金増加案一本となる。…熟議ノ結果、移入統制ノ件ハサル資金増加ノ案ニハ反対ノ態度ニテ進ムコトニ決シ」とある。10日、前日来の必死の運動にもかかわらず、形勢すでに定められたとして、外地米の法的統制を求める決議文を発し、実行委員会を解散した<sup>15)</sup>。そして、夜6時より幸楽にて政友会の代議士（砂田、河野、福井、青木、三善、高橋ら）と実行委員の代表（門田、片野、菱田、大橋、藤田、城島ら）および温らが懇親会を行い、今後の外地米対策を協議した。11日、温は埼玉県に出張し、熊谷市高等女学校にて開催の埼玉県学務部主催の国民更生運動講演会に出席し、来会の400～500名に対し、午後1時より3時まで更生運動と農家経営について講演を行い、終わって、その日に帰京した。

---

14) 『帝国農会報』第24巻第4号、昭和9年4月、129～133頁。

15) 同上、122、134頁。

3月13日、斎藤内閣は米穀対策、外地米対策について、臨時米穀移入調節法案、米穀需給調節特別会計法中改正法律案、政府所有米穀特別処理法案を衆議院に提出した。この3法案中、最も重要なものは臨時米穀移入調節法案で、その内容は臨時応急の施設として、昭和10年3月31日までに朝鮮台湾米の買い上げを行い、内地移入を調節する、その買入れ価格は時価に準拠する、というもので、単なる買い上げであって、移入に対し何の拘束力もない、従来どおりの自由移入主義であった。帝農の外地米移入の法的統制を根本義とする論は踏みにじられた<sup>16)</sup>。この日、正午より虎ノ門蹠翠軒にて民政党の有志代議士（高田耘平、高橋守平、武智勇記）と実行委員の代表（門田晋、大島英二、堀）および、温、平田幹事らが会合し、外地米対策について協議した。また、午後5時より鉄道協会にて貴族院の農政懇談会総会があり、月田副会長、3幹事と運動委員代表（門田、片野、堀）が出席し、農会決議の陳情を行った。15日は政友会の胎中代議士と米問題の協議、16日は貴族院に糸原議員を訪ね、外地米統制対策を渡した。17日は朝鮮米生産費の批判文を執筆し、また、午後6時より中央亭にて衆議院の米穀委員、東、島田、高橋、大本、三善、野村、池田、古山、八田、武田、松山、庄、石川、福井、高田、深水代議士を招待し、外地米統制について懇談したが、結局政府案を修正する形勢にはならなかった。19日は正午、燕楽軒にて政友会の米穀対策実行委員と農会の代表者委員（3幹事、麻生、片野、菱田、小串）の協議会を開いた。また、午後農林省にて農村経済更生部の幹事会に出席した。20日は東京府立農芸学校に行き、午前10時半より12時まで講演し、また、夜午後6時より中央亭にて農政研究会総会を開き、東武、荒川五郎ら30余名が出席し、温が事務会計の報告を行い、外地米統制を決議した。22日、温は松山兼三郎と共に東武代議士を訪問し、臨時米穀移入調節法案に対し、最後の努力を要望した。しかし、東代議士は「困難」なるを言明した。この日、運動委員、松山、中村、君塚、菱田らは

---

16)『帝国農会報』第24巻第4号、昭和9年4月、14～15頁。

高島幹事と共に議会で詰め切り、監視した。しかし、必死の運動むなしく、衆議院にて、外地米の統制に触れない拓務省案の臨時米穀移入調節法案が附帯決議をつけて可決され、貴族院に送られた。

3月23日、温は午前9時発にて静岡・愛媛に出張しようとした時、弟安長宏太郎死亡の連絡があった。しかし、日程変更の方法なく、禎子と慎吾に葬儀の件を依頼し、出張し、午前11時50分静岡に着き、旧城内図書館の会場に行き、品評会授与式に出席し、午後1時前より3時40分まで、温が農業経営より見たる都会の農業について講演した。終わって午後4時静岡を発し、10時35分三ノ宮に下車し、11時発の大智丸にて多度津に向かい、翌24日午前8時多度津に着き、さらに8時50分発にて多喜浜に下車し、小野寅吉宅を訪問し、西条に向かい福亭に投宿した。25日、温は西条公会堂に行き、県農会主催の東予4郡の農会技術者講習会に出席し、来会の30余名に対し、午前10時より午後5時半まで講義を行った。終わって、6時発にて帰宅した。なお、この日、貴族院本会議で、米穀3法案（臨時米穀移入調節法案等）が帝農側の運動むなしく可決された。26日、温は松山市に行き、県庁、県農会を訪問し、夜は梅ノ舎にて講習会講師の農林省技師渡邊保治らを迎え、門田晋会長、多田隆幹事と共に慰労会をした。27日は午前10時半、温、渡邊、多田の3人で出発し、内子経由にて宇和島に向かい、午後4時宇和島に着し、蔦屋に投宿した。28日午前10時半より南予会館にて南予4郡の農会技術者講習会を開き、温が午後5時20分まで養蚕経営について講義した。終わって、午後6時半宇和島発の第11和島丸にて、帰松し、翌29日午前8時半高浜に着し、帰宅した。そして、30日、上京の途につき、翌31日午前10時東京に着した。

4月も温は種々業務を行い、また出張した。1日は東京日々新聞、エコノミストの依頼による第65議会通過の農業法案の批評文の執筆、2日は農林省に出頭し、三宅発士郎経済更生部総務課長と京都講習の打ち合わせ、3日は東京日々新聞、エコノミストの原稿執筆、4日は幹事と本年採用の職員人事の人選協議等を行った。

4月5日から帝農は、農業経営並に農家経済指導者養成講習会を開催した（5月10日まで40日間。以下長期講習会と略）。講師は佐藤寛次、那須皓、東畑精一、近藤康男、温等々であった。この日、開会式があり、初日は佐藤寛次が農業評価学について講義した。温はこの日、小金井の沐思館に行き、第9回青年講習会に出席し、午後1時より4時まで農業経営について講義し、終わって、午後6時から東京会館にて京城日報外4社聯合の土曜会主催の米座談会に出席した。6日は温が午後3時間、長期講習会で農業経営について講義を行った。7日、温は午後赤坂三会堂にて開催の日本農学会大会に出席した。テーマは農村経済更生計画の批判であり、温は主として生産計画の批判を行った。夜、帝農職員採用試験に受験する山下肅郎、斎藤裕、今井、関谷の4人が来会し、受験上の注意を与えた。8日は午後1時より駒場の帝大農学部にて農学会主催の農業経済部会に出席し、農業団体統制に関する数人の報告（八木芳之助、勝賀瀬質等）を聞いた。夜、帝農職員採用試験に受験する山下、林が来宅し、温は受験上の注意を与えた。9日は帝農は経営部と販売斡旋部の増員のため、職員採用試験を行った。東大2人、京大4人、農実4人、農大9人、宇都宮5人、宮高農1人、立教1人が受験した。午前は筆記試験で、試験問題は「米穀政策の根本義について」、午後は5幹事にて口頭諮問を行った。10日、温は帝農職員採用人選につき意見を高島幹事に渡した。温の採用案は農学士の殿村又一、専門学校出身の山下肅郎、今井（実科）、野尻武夫（農大）であった。

4月10日、温は午後4時発にて山梨県に出張の途につき、8時半甲府につき、淡霞館に投宿した。11日午前10時半より県会議事堂にて開催の山梨県農会主催の米作多収獲品評会、堆肥品評会、農業経営共進会の授与式ならびに帝国農会自給肥料表彰伝達式に出席し、式後、温が第65議会について約1時間ほど講演を行った。夜は山梨県の交友会発会式に出席した。12日は山梨県西八代郡栄村、睦合村を視察し、村長から更生計画の説明を聞き、終わって、自動車にて身延山に行き、玉屋に投宿した。13日は身延山を参詣し、12時5分



身延山発にて帰京の途につき、6時帰京した。

4月14日、帝農にて職員採用を決した。温の案の通り、殿村又一、山下肅郎、今井、野尻武夫の4人であった。

4月15日、温は後9時30発にて京都に出張の途につき、翌16日午前8時30分京都に着し、京都府農会主催の農会技術員講習会（4月15日～17日）に出席し、午前9時半より午後3時半まで、来会の170余名に対し、農村経済更生計画の理論と実際について講義した<sup>17)</sup>。終わって、祇園の柳屋にて風間八左衛門会長等と晚餐後、午後10時半京都発にて帰京の途に着き、翌17日午前9時帰宅した。

4月18日、温は午前の3時間、長期講習会で講義「農業生産費について」を行った。また、午後は農林省に出頭し、渡邊侯治技師に農会技術員給の国庫補助は可及的速やかに農会に分配するように希望を述べた。19日は農村経済更生計画基本調査様式（以下、基本調査様式と略）を作成し、20日は午前9時より正午まで長期講習会で講義を行った。21日は基本調査様式の手入れ、米穀政策管見の執筆、22日（日）も米穀政策管見の執筆、23日は基本調査様式の手入れ、24日は胃腸、神経を痛め、欠勤し、自宅で静養したが、更生農村視察所感を執筆した。25日は基本調査様式の序文を訂正し、午後管能病院に行き、診察を受けた。血圧は心配なかったが、神経の病気は胃腸の状態が悪いためであった。また、尿検査の結果、糖分排出多く、砂糖澱粉控えるように指示された。26日は午前9時より幹事、参事にて米価対策の打ち合わせを行った。なお、この日、温は外地米生産費調査のため内閣に設けられた米穀生産費調査会委員を嘱託された<sup>18)</sup>。27日は国家経済研究の嘱託調査の米問題の執筆を始め、28日も米問題の執筆を行い、また、来る道府県農会幹事主任技師協議会の本年度事業について考案した。なお、この日、尿再検査の結果、温は軽き糖尿病であることが判明した。29日（日）も温は米問題の執筆を行った。

17) 『帝国農会報』第24巻第6号、昭和9年6月、118頁。

18) 『帝国農会報』第24巻第5号、昭和9年5月、114頁。

4月30日から3日間、帝農は事務所にて道府県農会幹事主任技師協議会を開催した。30日午前10時開会し、月田副会長の挨拶の後、長瀬農務局長の農務局の施設事業の説明、荷見米穀局長の米穀政策（臨時米穀移入調節法等）の説明等があり、午後、協議事項「農業経営調査に関する件」「主要農産物経済調査に関する件」「米生産費調査に関する件」「農村経済更生指導に関する件」「農会に於ける肥料に関する指導奨励に関する件」「負担比較調査に関する件」「農家組合指導に関する件」「農会に於ける販売斡旋事業進展に関する件」「農会職員の向上に関する件」が提案、説明され、委員会に付託された。5月1日（協議会の2日目）は午前9時より開会し、小平更生部長の「更生部に於ける施設大要」等の説明がなされ、午後1時より委員会を開いた。委員会は3部に分け、温は第1委員会の農業経営調査および農村更生指導に関する委員会に出席し、意見交換し、温が成案を託された。夜、5時半より幸楽にて慰労会があり、帰宅後、委員会決議案を草した。2日（協議会の3日目）は午前委員会、午後本会議を開き、協議事項の委員会決議案が採択され、閉会した。このうち、「農業経営調査に関する件」は道府県農会に担当職員を充実し、推進することであり、「主要農産物経済調査、米生産費調査に関する件」はいずれも重要な調査であり、遺憾なきよう調査を推進することであり、「農村経済更生指導に関する件」は農林省、地方庁に対し、経費の充実、生産統制、農会への助成等であり、「農家組合指導に関する件」は近時農村経済更生計画の実施にあたり農事実行組合の産業組合加入や養蚕実行組合の設置等が行われているが、養蚕に関しては養蚕実行組合、金融その他については農事実行組合を組織して、その利便を図るのは良いが、農業一般の指導奨励に関しては農会の実行団体として活動せしむること等であり、「農会職員の向上に関する件」は郡市町村農会技術員給国庫補助の貫徹であった<sup>19)</sup>。

5月3日以降も温は種々業務を行った。3日は全国農会技術者協会の第1回

---

19)『帝国農会報』第24巻第6号、昭和9年6月、1～5、129～130頁。

総会を帝農事務所にて開催し、全国から代表40名が出席し、常任理事松山兼三郎（愛知県農会幹事）が座長となり、増田常任理事の報告の後、昭和9年度事業、全国農会技術員大会等を協議した。4日は午前10時半より上野精養軒にて全国農会技術員大会を開催した。全国より600余名が出席し、高井二郎（埼玉県農会幹事）が開会の辞、松山兼三郎が座長となり、長瀬農務局長の祝辞、月田副会長、福井甚三、東武、高田耘平、高橋熊次郎代議士の演説、道府県農会長代表山脇延吉、農政協会代表原鉄五郎の祝辞等があり、会員の意見発表があり、会場立錫の余地なく、緊張せる大会であった。そして、次のような大会宣言と決議がなされた。「宣言 国家の非常時に際し農村更生の第一線に立ち微力を効せる農会技術員の使命愈々重大を加ふ、吾等は敢然名利を超越して農会主義を把握し、粉骨碎身一路農村難局の打開に邁進せんとす。茲に於て全国農会技術員大会を開催し、左記事項の確守遂行を期す。一、建国の大本たる農本主義の発揚に努むべし、一、勤勉努力苦難に屈せず以て農村指導者たるの天職に殉ずべし、一、人格の修養、技能の練磨に励め実践み躬行を以て農民の儀表たるべし」<sup>20)</sup> 農会技術員たちの気概を読み取ることができよう。5日、温は午後長期講習会で農会の使命と経済更生計画について講義した。6日（日）は米穀政策の執筆。7日、帝農の原田昇一参事が去る木曜日に警視庁に呼び出され、帝農会計について取り調べられたことが判明した。8日は午後5時より工業倶楽部にて開催の農民新聞社主催の土地制度座談会に出席し、また、7時過ぎからは麻布興都庵にて開催の富民協会の農村更生計画町村表彰の審査委員会に出席した。9日は帝農事務所にて販売幹旋所長会議を開き、東京（土井正己）、横浜（安藤重男）、名古屋（松山兼三郎）、京都（大島国三郎）、大阪（天明郁夫）、神戸（上坂正雄）、門司（斎藤亨）、札幌（山田勝伴）の各所長、帝農側から月田副会長、平田総務、岡田、増田、高島、勝賀瀬幹事が出席し、昭和9年度予算、新規計画等について協議した。また、午後5時半からは全購聯

---

20) 『帝国農会報』第24巻第6号、昭和9年6月、133～134頁。

の帝農職員招待による懇談会が幸楽にてあり、副参事以上が出席した。10日、11日は道府県農会販売斡旋主任者協議会を帝農事務所にて開催し、全国から48人の主任、農林省から長瀬農務局長、湯河農政課長、渡邊俣治技師ら、帝農側から月田副会長、平田総務、岡田、増田、高島、勝賀瀬幹事が出席し、協議事項「系統農会販売斡旋事業連絡に関する件」等を協議した<sup>21)</sup>。また、11日午後5時より神田如水館にて、喜多孝治代議士（政友会）主催の米座談会に出席し、米穀取引所の柳生氏が自由放任論を、ダイヤモンド社の原氏が専売論を主張したが、温は現米穀統制法維持論を主張した。12日は午後4時農林省に出頭し、外地米生産費について、安藤広太郎、佐藤寛次、大槻正男氏と協議した。13日（日）は終日在宅し、米穀問題の執筆。14日は長期講習会が終了し、修了証書授与式を挙行了。また、午後2時より首相官邸にて米穀生産費調査会第1回総会があり、出席した。堀切善次郎書記官長を会長として、議事が進められた。内容は外地米生産費問題であった。15日も米穀生産費調査会に出席した。16日は米穀政策管見の執筆、17日も米穀政策管見の執筆を行った。また、午後1時半より首相官邸にて米穀生産費調査会に出席し、意見交換の後、小委員会を設置し、安藤広太郎、有賀光豊、中瀬拙夫（台湾総督府殖産局長）と温が小委員となった。18日は午後1時より首相官邸にて米穀生産費調査会の小委員会があり、幹事案を検討し、ほぼ成案を得た。19日は山田欽が来会し、温が米穀生産費調査会小委員会について報告した。21日は午後1時半より首相官邸にて米穀生産費調査会第3回総会を開き、安藤委員長が小委員会報告を行い、協議し、朝鮮及び台湾における米生産費調査方法を決定した。それにより、昭和9年の米生産費につき、朝鮮では870戸、台湾では600戸を調査することとした<sup>22)</sup>。22日は明年度農林省に要求する事業及び補助についての私案を作成し、平田総務幹事に渡した。

5月23日、温は午前7時40分発にて茨城県水戸市に出張し、同県農会の農

21) 『帝国農会報』第24巻第6号、昭和9年6月、131～132頁。

22) 『帝国農会報』第24巻第7号、昭和9年7月、136頁。

業経営共進会の審査を行い、午後新興農場等を視察し、水戸に宿泊した。24日は猿島郡鹿島村の小森谷弥平氏の農業経営、森戸村の田村喜一氏の農業経営を視察し、筑波町に行き、山水荘に投宿した。25日は真鍋町の清水六右衛門氏の経営を視察し、午後5時半発にて帰京した。26日は、副会長、幹事にて明年度農林省に要求する事業、補助金について協議した。27日（日）は終日在宅し、米穀専売反対論を執筆し、28～31日も米穀専売反対論の執筆等を行った。また、31日に慎吾が長野県農会に赴任し、上野に見送った。

6月も温は種々業務、農政運動を行い、また出張した。1日は米穀専売論反対論を執筆し、2日は副会長、3幹事と6日からの道府県農会長会議の打ち合わせ、4、5日の両日は帝農の米穀政策調査委員会を開催し、米穀統制法補強案、専売案を議題として協議し、成案を得て道府県農会長協議会に提案することにした。

6月6日より3日間、帝国農会は帝農事務所にて、斎藤内閣に対し、早急に臨時議会を開き、米穀政策および蚕糸政策について根本政策を樹立することを求めるための道府県農会長会協議会であった。全国から47名の農会長が出席し、また、農林省より長瀬農務局長、荷見米穀局長らが臨席し、協議事項「米穀政策に関する件」「蚕糸政策に関する件」「肥料政策に関する件」「雪害地対策に関する件」を提案した。7日は午前に委員会を開き、温は蚕糸政策に関する委員会に出席し、委員会報告の取りまとめを行った。午後、本会議を開き、協議事項を決議し、実行委員として15県の委員（秋田の佐藤維一郎、福島の大島英二、埼玉の中島、新潟の藤田善太夫、長野の山本莊一郎、岐阜の菱田尚一、愛知の松沢清次郎、滋賀の松原五百蔵、兵庫の山脇延吉、島根の恒松於菟二、愛媛の門田晋、福岡の城島春次郎、佐賀の菊池龍太郎）を選出した<sup>23)</sup>。終わって、夜6時より芝浦いけすにて大宴会を催した。なお、この時、温は増田幹事問題（詳細不明だが、帝農会計の流用に関係）について主なる県農会長に

---

23) 『帝国農会報』第24巻第7号、昭和9年7月、141頁。

話をした。

この道府県農会長協議会で決議された「米穀政策に関する件」は、米穀統制法の強化、外地米の統制、減反、等を掲げ、大要は次の如くであった。(1)米穀統制法の改正（最低価格は米穀年度を3期に分け、各期の最低価格は米穀年度始期における最低価格にその期に至るまでの利子及び保管料を考慮して決定すること。最低価格決定にあたり参酌する米穀生産費は全国農家大多数を代表する普通農家の生産費とすること、生産費に土地以外の農業資本の利子及び保管料を参入すること。運賃諸掛に農家の庭先より米穀集散地にいたる運賃及び雑費を参入すること。肥料に有機質を評価加算すること。自家労働の労賃算定において経営主の労賃は日雇労賃の2割増しとすること。土地資本利子の算定において売買価格の4分の利子を加算すること等）、(2)外地米の統制（外地米の移入は法律より統制すること。外地米の移入は内地米穀需給上必要な数量を限度とすること。外地米の移入は政府が管理すること。外地に於ける過剰米は外地に於いて政府が買上げること）。(3)臨時作付制限（臨時作付制限を行う場合、内外地の作付制限割当は農村事情を考慮すること。作付制限は農家の希望によること。水稻作付制限による損失は政府が補償すること、作付制限の水田には代作を奨励すること）、(4)米穀販売の自治的統制の助成（農業者団体の自治的米穀販売組織及び其の運用を合理化すること。農業倉庫の設備機能を拡充すること。政府は助成金を増額し、低利資金を潤沢に供給すること）。(5)米穀検査の統一、(6)粳貯蔵の奨励、であった<sup>24)</sup>。

6月8日、道府県農会の15県の実行委員（佐藤維一郎、大島英二、山本莊一郎、藤田善太夫、山脇延吉、門田晋、菱田尚一等々）が集まり、3班に分けて、総理、農林、大蔵、3政党を訪問、陳情した。温は大蔵省と政友会を訪問し、決議を陳情した。

6月9日、帝農は幹事会を開き、増田幹事、大口周吉囑託が帝農の会計問題

---

24)『帝国農会報』第24巻第7号、昭和9年7月、1～3頁。

を報告した。調査の結果、帝農会計の実質上の欠損はなかったが、連続的に一時流用をしていたことが判明した。そして、この日、原田参事が辞表を提出したので、原田が流用の張本人であろう。11日、温は西ケ原に安藤広太郎（帝農評議員）を訪問し、増田幹事問題について意見交換をした。安藤氏は増田辞任論であった。この日の日記に「安藤氏ノ意ハ已ニ決ス」とある。その結果を温は平田総務幹事に報告した。12日、温は高島、勝賀瀬両幹事と協議し、3人の意見も増田辞任で一致した。13日、温は月田副会長宅を訪問し、増田幹事問題について他の幹事の意向を代表して所見を述べ、副会長に決意を促した。16日、温は増田幹事に会い、辞任を勧告した。この日の日記に「増田君ト懇談シ、辞任ヲ勧告ス。已ムヲ得サル事情ニ立至リタルモ多大ノ苦痛ナリシ」とある。19日、原田雄一参事が免職となり、また、増田幹事も辞表を提出した。これにより多年の懸案事項が一段落した。20日は正午より青山斎場に行き、去る18日に亡くなった古在由直先生の葬儀に参列した。21日は農林省に出頭し、新任の経済更生部総務課長の永松陽一氏に挨拶し、また、農林省の渡邊俣治技師と経営部の人件費について協議、また、帝農幹事と本年度実行予算について協議等した。22日は府中の母校建築進行状況を視察し、夜は明治生命の食堂にて原田雄一の送別会に出席した。23日は幹事と会計にて職員の見給の協議を行った。

6月23日、温は午後3時上野発にて長野県に出張の途につき、9時50分長野に着き、慎吾の出迎えを受け、青木旅館に投宿した。24日は慎吾と善光寺を参詣等をした。25日は午前7時40分発にて、長瀬農務局長とともに北佐久郡御代田村に行き、同村の調査及び経済更生計画について、村長、郡農会長、同技師らと意見交換を行い、温は自給経済の認識不足に対し注意を行い、5時帰宿した。26日は午前10時より県農会主催の養蚕対策座談会に出席し、自由に意見交換を行い、午後1時に終わり、1時20分発にて伊那町に向かい、5時着し、箕輪旅館に投宿した。27日、午前7時発にて、長瀬農務局長とともに上伊那郡南向村に行き、村役場にて午前9時より午後3時40分まで更生計

画の内容について村の更生委員らと意見交換を行い、終わって、病臥中の平野桑四郎（長野県農会長）を見舞い、伊那町に帰り、箕輪旅館に投宿した。28日は午前8時上伊那農学校に行き、同生徒、職員に対し、約1時間講話を行い、10時25分発にて帰京の途につき、6時帰宅した。29日は渋谷の原熙先生宅にて山崎延吉氏と久しぶりに会談し、30日は午後1時より駒場交友会に出席した。

7月も温は種々業務を行い、また出張した。1日（日）は石黒忠篤農林次官を私邸に訪問し、帝農の最近の人事一件（増田幹事辞任、再就職の件、内藤友明、飯岡清雄の件）について説明、懇談した。

7月2日から6日までの5日間、帝国農会は帝農事務所にて道府県農会農業経営主任者協議会を開催した。2日午前10時開会し、月田副会長が議長を務め、協議事項「繭価暴落に対する養蚕経営の合理的指導に関する件」「経済更生計画に於ける生産計画指導に関する件」「農家簿記普及並に活用に関する件」「農業個人経営調査に関する様式改正」等を提案、説明し、また、各県からの経営成績その他の報告がなされた。3日は温と平田幹事が議長となり、農家経済の根本問題、農業個人経営調査に関する様式改正等について協議した。なお、この日、斎藤実内閣が帝人事件で総辞職した。4日は農林省蚕糸局の布谷芳太郎技師が養蚕経営についての方針を説明し、熱心に議論が行われた。5日は終日委員会を開き、温は養蚕及び更生計画の委員会に出席し、夜は午後6時より大森見晴にて懇親会を行った。6日は経営主任協議会の最終日で、本会議を開き、協議事項を議決した。このうち、「繭価暴落に対する養蚕経営の合理的指導に関する件」の決議内容の要点は、(1)食料自給は農家の生活安定の第1要議であり、養蚕経営においても食料自給を原則として計画すること。(2)家族の労力を以って行える範囲に養蚕の規模を限定すること。(3)不良桑園を整理すること。(4)桑園の肥料は自給肥料によるを原則とすること。(5)生産費の軽減は重要だが、所得減少をもたらすので、現金的生産費の節減を図ること。(6)官民協力による強力な蚕糸業統制により繭価を維持すること、であった。また、



「経済更生計画に於ける合理的生産計画指導に関する件」の決議内容は、農村経済更生計画における生産計画は殆んど市場観察を欠いた一律的増産計画が多く、全国的にこのような増産計画が実施されると供給過剰となり、政策の破綻、農村経済の混乱をもたらすので、生産計画は慎重に進める必要があること、であった。<sup>25)</sup>

7月8日、岡田啓介新内閣が成立した。政友会から3人、民政党から2人が入閣したが、政友会は入閣した床次竹二郎、内田信也、山崎達之輔を除名し、政友会は野党に回った。農林大臣には政友会を除名された山崎達之輔が就任した。また、農林次官は石黒忠篤に代わり長瀬貞一農務局長が昇格した。

7月9日、鮮米協会の菱本長治が帝農に来会し、温は明日の朝鮮農会の幹部との会談の打ち合わせを行った。10日、帝農事務所にて、朝鮮農会の松井副会長、三井栄長理事、船越幹事及び菱本長治が来会し、月田副会長、温ら4幹事と米穀政策・外地米統制問題について意見の交換を行った。今回は結論を求めず、自由の立場から議論したが、朝鮮農会側は外地米統制に対し差別待遇反対の理由を陳述した。

7月11日、温は午後3時雷門発東武電鉄にて、栃木県の鬼怒川に出張の途につき、6時5分鬼怒川につき、鬼怒川館に投宿し、翌12日、栃木県農会主催の農会技術者講習会に出席し、午前10時より午後4時まで農業経営について講義した。13日は農林省の渡邊保治技師の講義で、温の講義はなく、鬼怒川の附近を散策し、午後3時40分鬼怒川発にて帰京の途につき、6時15分上野に着した。

7月14日午前、帝国農会は朝鮮農会の幹部と再度会談を行った。しかし、外地米問題では結論に至らず、会談を打ち切り、次の機会に再開することにした。なお、この日、帝農は北陸地方における水害状況（7月10日～12日、北陸地方一帯は大豪雨、河川の氾濫、大洪水により田畑の被害を受けた）を視察

---

25)『帝国農会報』第24巻第8号、昭和9年8月、1～3頁。

するために石橋幸雄を派遣した。15日（日）終日在宅し、米穀統制法批判の原稿を執筆した。16日は雑誌「瑞穂」の経営について、各幹事と協議し、結論は体裁を変え、頁を減じ、経費を削減し、町村農会に無償で配布することを決めた。17日は午前10時半より帝農事務所にて道府県農会長協議会実行委員会を開催し、秋田、茨城、埼玉、千葉、新潟、神奈川、愛知、岐阜、滋賀、兵庫、愛媛、福岡、佐賀の13県の委員が出席し、打ち合わせを行い、午後新内閣の岡田総理、山崎農相、藤井真信蔵相に陳情を行おうとしたが、不在で面会しえなかった。夜は6時より東京会館にて、山崎達之輔新農相ほか農林官僚を招待した。18日、実行委員は午前は政友会、午後は代表の門田、小串と月田副会長および温が岡田総理と藤井真信大蔵大臣を訪問し、陳情した。19日、実行委員は後藤文夫内相、町田忠治商工相、床次竹二郎通信相を訪問、陳情した。

7月19日、温は午後9時20分発にて神戸に出張の途につき、翌20日9時40分神戸に着し、県会議事堂に行き、兵庫県農村自力更生記念大会に出席した。650名ほど出席し、自力更生ならびに農業経営改善成績優良団体及び指導者の表彰式、大会宣言、決議を行い、午後は温が自力更生の検討について講演を行った。21日は兵庫県農会事務所にて開催の関西府県農会聯合会理事会に出席し、松山、大島、門田、麦生らと協議し、終わって、温は正午発の燕にて帰京の途につき、午後9時帰京した。

7月23、24日の両日、帝農は帝農事務所にて、道府県農会農家組合指導者協議会を開催した。道府県農会より34名、農林省より湯河農政課長、田中産業組合課長、渡邊保治技師らが出席し、協議事項「農事実行組合並養蚕実行組合制度と農家組合との関係に対し農会として執るべき方針に関する件」等を審議した。多くの出席者からは農家組合の法制化の希望があり、委員会に移し審議することとした。24日も農家組合指導者協議会を開き、午前9時より午後3時まで委員会、それより本会議を開き、委員会決議「農家組合の指導統制上農会の執るべき方針」を決めた。それは、4月の道府県農会幹事主任技師協議

会の決議の踏襲で、「農会員農家組合を設けたる場合に於いては其の組合は事業の実行に関し農会の指導統制に服するものとす」<sup>26)</sup>であった。25日は養蚕の指導方針について、また、米穀政策と食糧政策の原稿の執筆等、26日は米穀政策管見の執筆、27日は米専売案批判の執筆、28日は米穀政策管見の執筆、29日は米専売案批判、自由主義と小農の原稿執筆、30日も自由主義と小農の原稿執筆、31日は米穀政策の発達の原稿執筆等を行った。

8月も温は種々業務を行い、また、出張した。1日は米穀政策の発達の執筆、2日は長野県農会長山本荘一郎らが米払下げ価格問題にて農林省への交渉のため来会し、温と勝賀瀬幹事が同行し、荷見米穀局長を訪問し、交渉した。3日、温は埼玉県熊谷農学校に行き、埼玉県学務課主催の小学校教員講習会に出席し、来会の220余名に対し、午前9時より午後3時まで小農の本質を基礎とした農村問題の正しき認識の要件について講演を行った。4日は全国養蚕聯合組合を訪問し、片山氏に面会し、同会の運動方針を聞き、今後の運動について協議した。5日(日)は終日在宅し、蚕業新報の原稿を執筆した。6日は埼玉県に行き、農民講堂館にて開催の小学校教員の講習会に出席し、午後1時半より3時半まで小農の本質について講義した。7日は帝農の幹事会を開き、昭和10年度予算の大綱を協議した。8日は農林省に行き、更生部の永松陽一課長、永井、川井技師と農村経済更生計画基本調査様式について協議、また、副会長、幹事と岡田新内閣下の臨時議会対策について協議した。

8月9日、温は午前9時東京発の燕にて愛知県に出張の途につき、午後2時30分名古屋に着き、さらに熱田に行き、常滑電鉄にて新舞子に行き、舞子館に投宿し、翌10日温は大野町小学校に行き、愛知県農会主催の夏季大学に出席し、来会の技術者、実行組合長ら220余名に対し、午前9時より正午過ぎまで講義し、終わって、午後3時50分名古屋発の燕にて帰京の途につき、10時帰宅した。11、12日は終日在宅し、蚕糸業対策批判の原稿を執筆した。13日

---

26)『帝国農会報』第24巻第8号、昭和9年8月、138頁。

は午前、道府県農会長協議会実行委員会を開催し、菱田尚一、松山兼三郎、小串清一、石坂養平、中村哲蔵、山本莊一郎、川真田万太郎ら出席の下、今後の対策を協議し、来る 21、22 日に道府県農会長会議開催を決め、午後には山崎農相を訪問し、陳情した。14 日は月田副会長、松山、中村、小串、山本と共に首相官邸に行き、岡田首相に地方の状況を開陳し、農村救済の要望を行った。15 日は帝農事務所にて東京市農業調査委員会に出席し、また、幹事会を開き、道府県農会長会議の打ち合わせ等をした。16 日は基本調査様式の再検閲、17 日は農林省に行き、原、藤巻、渡邊らと母校校長問題の協議、18 日は東京市臨時農業調査委員会に出席、19 日（日）は終日在宅し、満鉄講義録の書き換え、20 日は農林省に行き、荷見米穀局長と懇談、また、湯河農政課長と販売機関の問題についての意見交換等を行った。

8 月 21、22 日の両日、帝農は、米穀対策、蚕糸対策につき、岡田内閣に臨時議会開催を要望すべく、道府県農会長会議を開催した。道府県農会長が 34 名出席し、農林省からは小浜農務局長、荷見米穀局長、井野蚕糸局長等が臨席し、協議の結果、従来の政府の施設は微温的に窮乏せる農村救済対策としては頗る不徹底だとして、(1)緊急実現を要する事項として、米穀対策及び蚕糸対策に対し本年産より根本方策を講じること、(2)政府の来年度予算に関する事項として、農村救済費は国防費と平行的に考慮のうえ、国民負担の均衡、救済土木事業の継続、肥料政策の継続、郡市町村農会技術員給国庫補助の徹底的増額を決議した<sup>27)</sup>。後、関西府県農会聯合会は農本主義を基調とせる輿論喚起高調のため、農道会を開いた。23 日は 4 幹事と昭和 10 年度予算の打ち合わせを行った。

8 月 23 日、温は午後 9 時 40 分東京発にて愛媛に帰郷の途につき、翌 24 日午後 9 時前帰宅した。本年西日本は大旱魃であった。24 日の日記に「広島地方モ旱天続き、尾ノ道市水道本日ヨリ断水」とあり、また、欄外に「松山地方

---

27) 『帝国農会報』第 24 巻第 9 号、昭和 9 年 9 月、1～2 頁、119 頁。

ハ明治五年以来ノ大旱魃」と記している。24日は終日在宅し、北土居の越智太郎（甥）より旱害の状況を聴いた。26日は娘の末光清香宅を訪問、孫の権一郎の教育について協議した。27日は県農会の多田隆技師らと自動車にて東温各村の旱害状況を視察した。惨害深刻であった。この日の日記に「東温九ヶ村旱害視察。門田晋氏ヲ私邸ニ訪問（病氣引籠）。県農会ニテ打合せ、多田技師及県田村君ト自動車ニテ沿道ヲ視察シツ、久米、小野、北吉井、川上、南吉井、浮穴、阪本、荏原、石井、各役場ヲ訪問シ状況ヲ聴キ、対策ニ付注意ヲ促ス。北吉井ハ山ノ内ノ一部ノ外真ノ全滅。小野、久米ハ八分減、南吉井七分減、石井六分減、荏原五分減、阪本、川上、浮穴四分減ト直感。吸上泉ノ乱設、地下水ノ争奪…、昨今地下水激減。飲用水ニ窮ス。農家ノ井戸大部分枯渇。宅ノ井、本日ヨリ揚水器ニカ、ラズ」とあり、また、日記の欄外に「大正十五年ノ香川、岡山ノ旱害ヲ視察シタルガ、本年ノ温泉伊予ハ比較ニナラズ」とある。28日は和田シゲオと安長宏太郎の墓参りをした。

8月29日、温は午前6時松山発にて省営バス、自動車にて高知に出張し、午後1時半着き、藤田屋に投宿し、翌30日、高知の物産陳列場にて開催の郡町村農会技術者の講習会に出席し、午後1時より4時まで農村計画について講義した。31日も午前8時より11時半まで講義を行い、12時高知を出て、5時久万町に着き、非常に疲労を感じ、谷亀に投宿した。そして、旅館にて貴族院議員上山満之進の「米穀生産費の正体」（東京朝日新聞8月22、23日付け）への反駁文を起草した。翌9月1日、温は旅館にて午後4時まで上山批判の論文を執筆し、4時25分久万町発の省営バスにて帰宅した。

なお、8月31日に岡田内閣は米穀対策に関する重要事項を審議するために米穀対策調査会官制を公布し、9月1日に委員、幹事の発令がなされた。米穀対策調査会の会長は岡田啓介内閣総理大臣であり、副会長は藤井真信大蔵大臣と山崎達之輔農林大臣で、委員は全部で35名で、政府・官僚側が6名、衆議院、貴族院が各10名、その他が9名で、その他の中に帝農代表として月田藤三郎副会長が入っていた<sup>28)</sup>。なお、温は幹事にも選ばれていない。

9月も温は種々業務を行い、また、出張した。2日は多田隆愛媛県農会技師らと自動車にて北温の各町村、潮見、堀江、粟井、河野、北条、難江、立岩、正岡村の早魃状況を視察した。河野村の被害尤も激甚であった。

9月3日、温は午後郡中発若松行きの船にて福岡に出張の途につき、翌4日午前5時下関につき、門司に渡り、博多に行き、県庁新館にて開催の中央畜産会主催の有畜農業講習会に出席し、来会の200余名に対し、午前10時半より12時半まで農業経営について講義し、午後1時半からは座談会に出席した。閉会後は県農会事務所における九州、中国、四国旱害対策県農会長会議にも出席した。5日午前中は旅館にて上山氏の米生産費論への反駁文の清書を行い、東京朝日新聞に送付した。また、午後1時半より5時まで有畜農業講習座談会に出席した。6日は福岡県糸島郡の諸村の早害地を視察した。激甚で半作ぐらいであった。7日午前10時より福岡県公会堂にて開催の九州、愛媛、香川各県旱害対策県農会長対策協議会に出席し、終わって、午後4時50分発にて帰京の途につき、翌8日午後5時帰宅した。

9月10日、温は午前7時40分上野発にて水戸に出張し、茨城県農会主催の第1回農業経営共進会褒賞授与式に審査長として出席し、式後、2時間農業経営に関する講演を行った。清香亭にて会食後、午後8時50分水戸発にて帰京した。

9月11日、温は月田副会長及び幹事と昭和10年度予算及び事業計画について協議し、成案を得た。12日は農林省に出頭し、小浜八弥農務局長、小平更生部長等を訪問し、四国、九州の旱害視察状況を報告し、農林省の対策を聞いた。13、14日は3幹事にて帝農総会提出建議案の協議を行った。15、16日は富民協会の農業年鑑「農民の負担均衡と地方財政」の原稿を執筆、17日は帝農総会提出建議案の協議を行い、また、午後5時からは司法大臣官邸に行き、司法研究会に出席し、大審院所長ら20余名に対し農村問題について約2時間

28)『帝国農会報』第24巻第10号、昭和9年10月、122頁。

講演を行った。終わって、東京会館にて開催の富民協会の優良更生村審査会に出席し、10時40分帰宅した。18日は在京評議員会を開き、岡本英太郎、安藤広太郎、八田宗吉、高田耘平、森円蔵ら出席の下、評議員会提出議案を協議した。19日は千葉県に県農会主催の農業経営研究会に出席し、1時間半程講演し、午後5時帰宅した。20日は東京市足立区入江町の横山修吉氏の抜穂式に参列した。21、22日は全国評議員会を開催し、昭和10年度予算案、総会提出議案を協議した。なお、21日に大阪を中心に稀有の暴風雨があった。また、この日、愛媛県の早害陳情団50余名が上京した。23日(日)終日在宅し、満鉄講義録を草した。24日も終日在宅し、貴族院議員上山満之進の率勢米価論への反駁文を執筆した。その内容は、『帝国農会報』10月号に「上山氏の米穀生産費論は米穀政策を混乱せしむるに過ぎぬ」との題で掲載されているが、大要は次の如くである。上山の議論は(1)米穀生産費は各地、各農家区々である。(2)高低区々のものを平均して価格を公定すれば平均以下の生産費のものは儲けさせ、平均以上のものは損をさせる。(3)個々の生産費に高低種々のものがあるから、計算の仕方によって、高低価格が高くもなり、低くもなるように移動する。(4)生産費の項目の選定についても種々の議論ありて帰一確定していない。(5)生産費によって価格を公定することになれば農家が故意に生産費を高くする恐れがあるから不安である。(6)だから生産費を主材料として米穀政策の公定価格の算定に用ゆるは不都合である。(7)生産費は米価吊り上げの口実に過ぎない、というものであった。要するに上山の議論は米穀の価格問題に農業経済理論を適用するは不都合との結論で、反農業論であり、農業搾取論であるとして、温が批判した。すなわち、温は米穀生産費は調査農家を増やしていけば、両極端の比率が減少し、中間的なものが大多数になり、その平均が何よりも適正で、合理的である、世界的にも採用されている、そして、価格政策にその物の生産費を否定しては、適正なる政策は樹立されない、と論じた<sup>29)</sup> 25日は午

---

29)『帝国農会報』第24巻第10号、昭和9年10月、1～16頁

前 10 時より農林省にて農村経済更生中央委員会の幹事会に出席し、来る委員会の答申案について協議した。26 日は農業経営審査特別委員会を開催し、安藤、渡邊委員出席の下、審査を行った。また、4 幹事にて米穀対策調査会にて案として出されている米穀自治管理案について意見を交換した。

9 月 27 日から 3 日間、首相官邸にて第 3 回農村経済更生中央委員会があり、幹事として出席した。27 日の委員会では農相の諮問第 1 号「経済更生計画の実行上農山漁村の経済組織に適合する農村工業の普及徹底を図るが為採るべき方策」、第 2 号「主要養蚕府県に於ける農村産業経済組織の根本的改善を図るが為経済更生計画樹立実行上採るべき方策」、第 3 号「経済更生計画樹立実行上農産物の販売統制及生産調整を徹底せしむるが為採るべき方策」の説明と答申幹事案の説明がなされた。28 日は委員会を開き、温は第 2 と第 3 の委員会の双方に出席した。また、その間の午後 1 時より 2 時半までは軍人会館にて開催の在郷軍人将校の第 1 回農村経済問題講習会に出席し、講演を行った。29 日は委員会の総会を開き、委員会決議案を議決し、正午過ぎ閉会した<sup>30)</sup>。その後、午後 2 時からは柑橘輸出組合に関し、生産者側の下相談、午後 5 時から日本工業倶楽部にて開催の農民社主催の肥料問題座談会、6 時半からは愛媛県人会に出席した。30 日（日）は終日在宅し、三井報恩会に資金を要求する材料を執筆した。

10 月も温は種々業務を行った。1 日は九州・四国の旱害対策陳情委員が上京し、共に、正午、山崎達之輔農相、後藤文夫内相に面会、陳情した。また、政友会本部も訪問し、陳情した。2 日は午前 10 時より商工省において、柑橘北米輸出改善委員会があり出席した。3 日は帝農幹事会を開き、道府県農会長会議開催の件、風水害地視察員派遣の件、米穀対策調査会で提案されている米穀自治統制の審議のため地方農会幹部召集の件、等を協議した。4 日は午前 1 時より柑橘北米輸出改善委員会があり出席したが、生産者側と輸出業者側の妥

---

30) 『帝国農会報』第 24 巻第 11 号、昭和 9 年 11 月、113～120 頁。



協ならず、協議不調に終わり、両団体の自由輸出となった。6日は三井報恩会に要求する問題についての研究や国家経済研究会からの委嘱による米穀政策私見の執筆等。7日も米穀政策私見の執筆等を行った。8日は東武代議士（米穀対策調査会特別委員）を私邸に訪問し、米穀自治統制問題、外地米問題、帝農会長問題等について意見交換をした。また、米穀自治統制法問題について政友、民政両党批判の文章を執筆した。9日は幹事、参事、副参事にて米穀自治統制について研究を行った。また、午後6時から日比谷山水楼にて富民協会主催の優良経済更生村表彰の審査会に出席し、全国賞5点、地方賞10点の表彰村を決定した。10日は米穀自治統制案の各案の批評を執筆、11日は帝農にて地方農会の幹部（富山の石山治幹事、山形の菅野三津蔵幹事、埼玉の高井二郎幹事）出席の下、米穀自治統制について協議した。12日は農林省に荷見米穀局長に面談し、米穀対策調査会の状況を聞き、意見の交換を行い、局長から「或用務」（内容不明）の依頼を受け、「承諾」した。また、東武代議士を訪問し、政友会の「米穀管理及び自治統制案」の地域割に関する意見を聞き、「或工作」（内容不明）を約した。13日も米穀政策私見の執筆、米穀自治統制の区制の研究等。14、15日は米穀政策私見の執筆、16日は農村経済更生計画指導に関する実行案の立案、また、幹事と帝農総会の建議案の修正等、17日は米穀政策私見の最後の結論部分を執筆した。

10月18日から20日までの3日間、帝国農会は道府県農会長協議会を開催した。それは岡田内閣に対し臨時議會を早急に召集して、米穀政策、蚕糸政策、災害地方ならびに養蚕地方救済等重要農政問題の解決を要望することであった。8日は月田副会長が病気のため、門田晋愛媛県農会長が座長として会議を進め、臨時議會対策の要望、粃貯蔵助成金に関する要望、マラオン栽培に関する要望が説明され、例により山脇延吉兵庫県農会長の「帝農攻撃」の一席があり、午後は委員会に移り、成案を得た。19日は前日の委員会案を決議し、ついで米穀自治統制問題について議論し、10名の委員会に付託することになった。20日は委員会で米穀自治統制問題を決めた。また、総理、内務、農

林、大蔵大臣及び各政党に決議事項を陳情し、温は総理・内務・政友組を率いた。道府県農会長協議会で決議された臨時議会对策の要望事項の主要点は、(1)米穀政策に関する件（外地米の管理統制、米穀統制法を改正し、最低価格を月別に算定すること、米穀の自治的統制は農会及び産業組合が協力して実行すること）、(2)蚕糸政策に関する件（繭の生産統制、生糸の販売統制、農業経営上養蚕偏重の矯正等）、(3)災害地方ならびに養蚕地方救済に関する件（食糧欠乏地方に対する政府米の貸下げ、土木事業の実施、低利資金の償還延期、肥料資金の融通等）、(4)その他農会多年の要望（農家負担軽減、農会技術員給国庫補助等）、であった<sup>31)</sup>。21、22日の両日は全国評議員会を開催し、23日からの第26回帝農総会の議案について審議したが、そのうち、米穀自治的統制については議論はまとまらなかった。この日の日記に「米穀自治統制ニ付、議論マトマラズ。結局農家会ト組合トノ共同ニテ行フト云フ抽象的ノコトヲ決議ス」とある。

10月23日より26日までの4日間、帝国農会は第26回通常総会を帝農事務所にて開催した。農林省側から山崎農相、小浜農務局長、荷見米穀局長らが臨席した。1日目の23日に月田副会長の挨拶、帝農の諸般の報告があり、病气辞任した牧野忠篤会長の後任の選挙が行われ、選考委員会が貴族院議員の酒井忠正伯爵を推薦し<sup>32)</sup>、満場一致により選出した。あと、昭和8年度の決算案、10年度の予算案、農林大臣の諮問案「本年ニ於ケル各種ノ災害ノ農村ニ及ボセル影響並ニ之ガ対策ニ付農会ノ採ルベキ方策如何」がだされ、委員会に付託された。24日は新会長の酒井伯爵の挨拶の後、各種建議案「米穀政策ニ関スル建議」「蚕糸政策ニ関スル建議」「災害地方並ニ養蚕地方救済ニ関スル建議」「農

31) 『帝国農会報』第24巻第11号、昭和9年11月、113～120頁。

32) 牧野会長は昭和6年10月から帝農会長を務めていたが、7年9月以降体調をくずしていた。そのため後任を探し、牧野は当時の後藤文夫農相と相談し、酒井伯爵に白羽の矢を当てた。酒井忠正は明治26年福山藩主の次男に生まれ、旧播州藩主酒井家の養子となり、大正7年京都大を卒業、大臣秘書官を経て12年から貴族院議員を務め、牧野会長とは知己であり、後藤文夫とは金鷄学院や国維会で親交があり、その関係から選ばれた（『帝国農会史稿 記述編』472～473頁）。

業研究設備ノ充実に関スル建議」「負担均衡促進ニ関スル建議」「肥料政策確立促進ニ関する建議」「農業保険制度促進ニ関スル建議」「郡市町村技術員俸給国庫補助実現促進ニ関スル建議」が上程され、委員会付託となった。温は農林大臣諮問案の委員会を担当し、答申の成案を任された。25日も各委員会で審議がなされ、農相諮問委員会では、温作成の答申案が審議された。この日の日記「午後一時答申ヲ作成ス。那須、佐藤両氏其他ノ意見ニヨリ、良キ答申案ヲ得タリ」と記している。26日に各委員会の報告がなされ、各議案を決定した。このうち、温が執筆した農林大臣諮問案への答申は、「本年ハ全国ヲ通ジ稀有ノ災害続出シ積年ノ疲弊一層深刻ヲ加ヘ、多クノ農村経済ハ公私共ニ殆ンド破滅ニ瀕シ、精神的大打撃ヲ蒙リ動モスレバ自暴自棄ニ陥ラントシ社会的思想的ニ其ノ影響ノ容易ナラザルモノアリ。従ツテ之レガ救済復興ハ国家ノ非常特別ナル施設ニ依ラザルベカラズト雖モ系統農会ニ於テモ国家ノ施設ト相俟ツテ左ノ如キ方針ニヨリ指導スルヲ以テ最モ適当ナリトス」として、災害による農村の破滅を強調し、その救済を訴え、具体的には、(1)応急的食糧や種籾の配給斡旋、(2)経済的保健食糧の自給調整の研究、(3)農村匡救土木事業の実施については農村民を潤すように実施すること、(4)作物、家畜の選定に注意し、生活の安定を目標とする農業経営を樹立すること、(5)災害地帯、積雪地帯における農村工業の研究を進めること、(6)豊凶平均所得を目標とした予算生活を奨励すること、(7)災害に備えるための備荒貯蓄の奨励、(8)災害地方における青年男女の離村に対する懇切なる指導を行うこと、(9)災害地方における更生計画の樹立、(10)農村更生の根源は農民精神の振起作興にあるを以て、あらゆる方法により之が鼓舞激励に努め心機の転換を図り農会独自の施設により中心人物の養成、青年男女の教養、更生運動の指導等精神運動に力を注ぐこと、などを掲げていた<sup>33)</sup> 他の決議案中「米穀政策に関する建議」の要点は、(1)米穀統制法の改正（最低価格は金利及び保管料を加算し、各月別に定めること、米価が最高価

33) 『帝国農会報』第24巻第11号、昭和9年11月、4～5頁。

格と最低価格との平均価格以上にある場合に於いて市価に悪影響を及ぼさざると認める場合に限り、最高価格以下の価格をもって売り渡すこと)、(2)外地米の統制(外地米の移入は内地米需給上必要なる数量を限度とし、その移入は政府が管理すること、外地における過剰米は外地における生産費其の他の経済事情を参酌して定めた価格で政府が買上げること)、(3)米穀の自治的統制(米穀の自治的統制は法をもって強制することは農村の実情に鑑み慎重を要するをもって、農会及び産業組合協力してその衝に当たり、政府がこれを助成すること)であった<sup>34)</sup>。

10月27日、帝国農会総会決議の陳情のために、秋田の佐藤維一郎、山口の国光五郎、高知の伊野部重明の農会長は内務大臣に陳情した。この日、温は午前10時より農林大臣官邸にて開催の米の格差委員会に出席し、また、国家経済研究会の委嘱による米穀政策私見を執筆した。30日は農林省に行き、永松経済更生課長、小平経済更生局長と更生計画指導事業の速決について、また、荷見米穀局長と米穀自治統制について意見の交換を行った。31日も農林省経済更生部に行き、更生計画指導事業費について協議した。

11月も温は種々業務を行い、また出張した。1日は農林省に行き田淵会計課長に面会し、大蔵省の予算査定を聞いた。また、この日、温は帝国農会の内部制改革案を作成し、平田総務担当幹事に渡した。2日は東北6県の凶作惨状と対策について幹事と協議し、温が対策を担当することになった。また、国家経済研究会の委嘱による米穀政策私見の執筆を行い、3、4日も米穀政策私見の執筆し、書き上げた。5日は東北6県の凶作地の調査法の考究し、6日も東北凶作地の調査要項の考案した。また、この日、大蔵省の予算査定が農林省要求の1割しか認めなかったので、急遽、道府県農会長協議会実行委員会を開くことを決めた。7日、温は午後3時東京発にて水戸に出張し、5時着し、菊屋旅館に投宿し、翌8日午前10時半農会に行き、小麦合理的生産講習会に出

---

34)『帝国農会報』第24巻第11号、昭和9年11月、8～9頁。

席し、来会の40余名に対し、小麦増産計画について少し話し、直ちに11時8分発にて帰京した。

11月8日、帝農は道府県農会長協議会実行委員会を開いた。実行委員及び酒井会長以下の幹事が出席し、大蔵省予算査定に検討を加え、甚だ不満だとして、実行委員の小串清一（神奈川県農会長）、鈴木清助（山形県農会副会長）、山本莊一郎（長野県農会副会長）らと共に山崎農林大臣を訪問し、予算復活を要望した。9日も山脇ら実行委員と共に、総理官邸に行き、岡田総理および藤井蔵相に陳情した。岡田首相は一言「出来ルダケヤリマショウ」であり、藤井蔵相は無言であった。後、後藤文夫内相にも陳情した。10日は農林省に出頭し、経済更生部にて本年度の更生事業の予算を決定した。1万4,000円で昨年より1,000円の減額であった。また、財政経済時報依頼の米穀政策の原稿（米穀統制法批判）の執筆を行い、11日も原稿を執筆した。12日は酒井会長が山崎農相、農林次官、局長らを築地の新喜楽に招待し、温ら幹事一同も出席した。13日は帝国農会の米穀政策調査委員会を開催し、大島英二、谷津新八郎、石坂養平、門田晋、城島春次郎、有働良夫、安藤広太郎、麻生正蔵らの委員及び酒井会長、月田副会長、平田、高島、勝賀瀬、温が出席し、荷見米穀局長の出席を求めて、政府の米穀対策調査会に提出する幹事試案（米穀統制法の改正、米穀の自治的管理、粳の貯蔵）の説明を聞き<sup>35)</sup>、その試案中、米穀の自治的統制案（内地、植民地における過剰米統制のために内地では販売組合、植民地では統制組合を設立）に反対し、帝農の主張に基づく対案（法をもって急激に統制することに反対）を決めた<sup>36)</sup>。14日、道府県農会長協議会実行委員が上京し、農林省予算の復活および凶作地方救済予算の増額のために陳情<sup>37)</sup>。また、帝農の米穀調査委員会の委員たちも政党に陳情した。

11月14日、温は午後9時40分東京発にて福井県に出張し、翌15日午前11

35) 『帝国農会報』第24巻第12号、昭和9年12月、133、134頁。

36) 同上、126、133頁。

37) 同。126頁。

時 16 分福井に着し、旅館に投宿した。16 日、温は午前 10 時半より福井県農会楼上にて開催の小麦増殖に関する講習会及び協議会に出席し、来会の 60 余名に対し、農業経営より見たる小麦生産について午後 2 時半まで講演を行った。後は勝賀瀬幹事が販売幹旋について講演をした。17 日も小麦増殖の協議会に出席し、午後 3 時閉会した。後、温は糸魚川に行き、駅前のかんのや旅館に投宿し、翌 18 日は午前 7 時 25 分糸魚川を出て、長野に行き、慎吾とあい、宿泊した。19 日午前 7 時 45 分長野発にて、帰京の途につき、午後 2 時 50 分上野に着した。そして、一寸帰宅し、直ちに出勤し、午後 4 時から評議員会を開き、優良農会の表彰の選定を行った。21、22 日は東北地方の凶作調査に関し、高島一郎、青鹿四郎、金子正らと協議し、23 日は『帝国農会時報』の巻頭言の執筆を行い、25 日（日）は在宅し、『帝国農会法』1 月号の原稿執筆（農業と天災）した。

11 月 27 日、岡田内閣下の第 66 臨時議会が召集された。岡田内閣の最初の議会であり、災害対策の予算が提案された。なお、藤井蔵相が倒れ、代わってまた、高橋是清が大蔵大臣に就任した。28 日に臨時議会の開院式があった。29 日、帝国農会は臨時議会への働きかけのために、道府県農会長協議会実行委員会を開催し、大島英二（福島県農会長）、小野、中村哲蔵（茨城県農会長）、松原五百蔵（滋賀県農会副会長）、大島国三郎（京都府農会幹事）、河野、谷岡らが出席し、酒井会長以下幹部が協議し、午後政友会、民政党らに陳情した。午後 6 時からは中央亭にて農政研究会幹事会と実行委員との懇親会を開いた。東武、高田耘平らが出席し、軍部の横暴等につき議論があった<sup>38)</sup>。30 日は門田晋ら実行委員が酒井会長の幹旋で、貴族院各派に陳情した。

12 月も温は種々業務を行い、また、出張した。1 日、温は衆議院蒸楽軒にて門田晋及び県選出代議士と会合し、愛媛県の早害問題について協議した。3 日は門田晋と今後の運動の打ち合わせ等をした。また、農林省に出頭し、農政

---

38) 士官学校事件。村中孝次、磯部浅一ら青年将校のクーデター計画容疑で、11 月 20 日に逮捕。

課で三井報恩会の件の協議等した。

12月4日、温は午前10時半東京発にて九州各県への出張の途につき、翌5日午後1時50分熊本に着し、研屋支店に投宿した。6日、温は午前10時農学校にて開会の県農会主催の小麦増産の講習会に出席し、来会の200名弱の郡町村農会技術者に対し、午後4時まで農業経営について講演を行った。7日も午前9時より正午まで農村経済更生計画について講義を行った。終わって午後2時20分熊本発にて長崎に向かい、午後8時長崎に着し、上野屋に投宿し、翌8日、長崎県公会堂にて開会の県農会主催の農会振興懇談会に出席し、郡農会長ら30余名と農会の振起発展策について協議した。9日は午前諫早に行き、同小学校にて開会の諫早農会振興懇談会に出席し、温と勝賀瀬質が来会の200余名に対し、午後2時半まで講演を行った。終わって、島原に行き、7時半島原に着し、国光旅館に投宿し、翌10日午前10時より武徳殿にて開会の南彼杵郡の農会振興懇談会に出席し、温が2時間余り講演を行い、後、勝賀瀬も講演し、懇談した。終わって、佐賀に向かい、午後9時佐賀に着し、松本に投宿し、翌11日午前8時より、佐賀県農会主催の農村経済更生指導者講習会に出席し、温は来会の120余名に対し、午後7時まで7時間半にわたり、講義を行った。12日も午前8時から午後3時半まで6時間講義を行った。終わって、4時20分佐賀を出発し、博多に向かい、6時20分博多に着き、放送局に行き、7時30分より8時まで農業についての放送をし、8時20分博多発にて帰京の途につき、翌13日午後8時40分東京に着した。

12月16日(日)温は病気入院中の月田副会長を築地聖路加病院に見舞った。17、18日は帝農事務所にて農業経営審査会を開催した。19日は東北6県の凶作視察の報告会(森茂夫、千葉容山、殿村又一、野村千秋)に出席した。20日は帝農職員を増俸を協議し、千葉を副参事に昇格させた。21日は午前、佐藤寛次博士と共に三井報恩会を訪問し、3万円の助成を要望した。また、午後1時より農林省にて農村経済更生事業に関する団体代表者協議会に出席し、負債整理その他につき協議、夜は霞ヶ関茶寮に3幹事による酒井会長を招待し

た。22日は午後5時半より平沼男爵主催の帝農役員招待会に酒井会長、高島幹事、温、安藤、佐藤、有働、東、高田らと共に出席した。目的は農村自治倶楽部（平沼会長）との連絡、懇親のためであった。24日は農民社依頼の原稿の執筆等、26日は午後4時国家経済研究所に行き、米穀政策について説明した。27日は孫の照香の結婚式に出席した。28日は目黒の雅叙園にて忘年会。29日、温は午後11時東京発にて帰郷の途についた。

## 第2節 講農会、東京帝大農学部実科独立運動関係

講農会について。温は大正10（1921）年1月以来、ずっと講農会長を続けていた。昭和9年2月10日青山広徳寺にて講農会の総会があり、役員改選の結果、全部重任で、会長もまた温が再任された。温はこの日の日記に「会長モ亦重任、実ハ閉口」と記している。4月19日午後5時より駒場にて実科1年生の歓迎会があり、講農会長として一場の挨拶をした。

東京帝大農学部実科独立運動について。前年の昭和8年3月から実科の校舎の建設が府中町で始まった。校舎の建築は進んだが、校長問題については決まらないままであった。

昭和9年2月2日午後5時半より東洋軒にて交友会幹事会を開き、母校校長問題について協議し、3月2日にも幹事会を開き、同問題を協議した。大勢は古在由直が本命であった。21日に温は病氣療養中の古在由直先生を見舞った。6月4日、交友会幹事会を開き、校長問題を協議し、温が古在先生を訪問し、意向を聞くよう託され、11日に温は古在先生を訪問した。だが、古在先生は臥して談話し、口重く、言葉も通じ難き状況であった。温は、校長問題について交友会幹部との会談を古在先生に要請したが、20日以降にしてくれとのことであった。ところが、6月18日午前9時10分、古在先生が死去され、校長問題全く一頓挫した。30日、帝農事務所にて駒場交友会理事会および総会を開き、役員の半数改選及び運動方針などを協議した。そして、次の校長候補として農事試験場長の安藤広太郎に白羽の矢をあて、7月、交友会副会長の原鉄



五郎が文部省を訪問し、また、安藤氏とよく交渉したが、結局安藤氏も引き受けなかった<sup>39)</sup>。8月16日、温は農林省の竹山氏から、小平権一の話として、石黒前次官が校長に必ずしも「強辞」でない旨を聞いた。そこで、17日、温は原鉄五郎、藤巻雪生、渡邊侯治、竹山と会合し、母校校長問題を協議し、20日に温は石黒氏を私邸に訪問し、校長の件を懇談した。石黒氏は「大分真剣ニ考ヘラル」様子であった。しかし、石黒氏も結局引き受けず、本年も校長問題は決まらず、越年した。

### 第3節 家族のことなど

家族関係では、長女の末光清香（明治28年3月21日生まれ、38歳）は末光家で子供3人（照香、権一郎、満子）を育てている。このうち、東京にいた孫の照香の縁談が進み、10月14日に長野県茅野の両角四郎（東大経済卒）と見合いし、12月27日に明治神宮前の大例館にて式をあげ、結婚した。

次女の禎子（明治35年2月2日生まれ、31歳）は、温と同居し、作家として活動し、戯曲を発表し続けている。

4女の綾子（明治41年10月1日生まれ、25歳）は前年4月25日に小野基道と結婚し、神奈川に新居を構えていが、本年12月28日、新居浜の大原人絹会社に就職することになり、帰国した。

長男の慎吾（大正元年8月23日生まれ、21歳）は温と同居し、東京帝国大学農学部実科の学生を続け、本年3月実科を卒業した。本年は不景気で慎吾はすぐには就職できなかった。5月15日に温は慎吾の履歴書を渡邊侯治を通じ、長野県農会に送り、18日に長野県農会より採用決定の通知が来た。そして、5月31日、慎吾は温に見送られ、長野に赴任の途につき、6月1日長野県農会技手に就職した。月俸給70円であった<sup>40)</sup>。

本年、親族に不幸があった。温の妹4女のシゲオ（明治28年10月11日生

39) 駒場交友会『母校独立記念号』（昭和11年）、318～320、353頁。

40) 岡田慎吾「履歴書」、岡田文庫所蔵。

まれ。大正6年北吉井の和田登に嫁ぐ。38歳)が、3月21日に死去した。この日の日記に「同人ハ兄弟中尤モ柔軟ナルニ、和田ニ嫁シテ苦勞多ク、子供ノ成長ヲ見スシテ死亡セルハ可愛想ナリ。不幸ノ人ナルカナ」と記している。さらに不幸が続き、弟、次男の安長宏太郎(明治11年2月27日生まれ、56歳)が、その2日後、3月23日、死亡した。宏太郎も不幸な人生であった。